

アイヌ語の継続形式＋完了形式の意味機能*

馬 長城

Meaning of the Progressive Form + the Perfect Form in Ainu Language

MA Changcheng

要旨：本稿はアイヌ語の継続形式「kor an」、「wa an」と完了形式「a」が共起する場合の意味機能を記述するものである。「kor an」＋「a」は主体動作動詞と共起する場合：1、発話時まで続き、発話以後も続く可能性がある継続動作；2、最近の活動；3、個々の時間幅のある継続動作からなる習慣；4、点として捉えられる継続動作からなる習慣を表す。「kor an」＋「a」は主体変化動詞、客体変化動詞と共起する場合、限界のある過程として捉えられる。一方、「wa an」＋「a」は状態動詞、主体変化動詞、客体変化動詞と共起する場合、それぞれ「その状態が発話時点まで続いていること」、「最近の状態」、「その変化の継続結果が発話現在において鮮明に残っていること」を表す。

キーワード：アイヌ語 継続形式 完了形式 共起 意味機能

1. はじめに

アイヌ語の継続形式「kor an」と「wa an」はそれぞれ動作継続、結果継続という意味を表すとされ（中川 1981、佐藤 2006）、一方、アイヌ語の助動詞「a」は完了という意味を表すとされる（田村 1997、佐藤 2007）¹。しかし、これまでの研究では、アイヌ語の継続形式「kor an」、「wa an」と完了形式「a」の意味機能に関する個別記述は多いが、例（1）と例（2）のように、継続形式と完了形式が同じ文に現れる場合の意味記述はまだ見られていない²。

- (1) nep wa an pe kusu ne ya k=erampewtek (ku · erampewtek)
何やら ため COP³ か 1SG.SBJ=知らない (1SG.SBJ · 知らない)

¹ それぞれの複数形は「kor oka」、「wa oka」、「rok」である。本稿では単数形「kor an」、「wa an」と「a」の形で代表させる。

² アイヌ語の「継続形式」と「完了形式」が共起できるという現象は北海道大学文学研究院佐藤知己教授より教示されたものである。

³ 本稿では例文にグロスをつける際、以下の略語を用いた。

1/2/3…1 人称/2 人称/3 人称、COP…コピュラ、INDF…不定、INCL…包括、ITERA…反復、

korka ø=eutastasa=pa⁴ kor ø=oka a wa
 けれど 3PL.SBJ=言い合う=PL ながら 3PL.SBJ=いる PL PRF SFP
 「なんの理由でか知らないが言い合いをしていたよ。」(萱野 2002⁵: 126)

- (2) naa pewrekur cise ø=sak yak a=ye k=esatcanpene
 まだ 若人 家 3SG.SBJ=を持っていないと INDF=言う 1SG.SBJ=気がもめる
 (ku · esatcanpene) wa k=an a (ku · an a) korka
 (1SG.SBJ=気がもめる) て 1SG.SBJ=いる PRF (1SG.SBJ=いる PRF) けれど
 ø=yay easirkar yak ku=inu ku=kotuyasi
 3SG.SBJ=再婚する と 1SG.SBJ=聞く 1SG.SBJ=いいと思う
 「まだ若い人が妻に死なれたということで気がもめていたけれど、
 再婚したと聞きよかったと思っている。」(萱野 2002: 438-439)

筆者が収集しているデータの中には、例(1)と例(2)のように継続形式と完了形式が共起する文が数多く見られる。本稿の目的は日本語や英語のアスペクトについての研究成果を参考にしながら、アイヌ語の継続形式と完了形式が共起する場合に、表わせる意味を記述することである。

現在、アイヌ語のいずれの方言においても話者数は少なく、実地調査は極めて困難である。そこで、本稿では実地調査を行う代わりに、これまでに公開されているアイヌ語の言語資料を研究データとする。公開されているアイヌ語の資料のうち、沙流方言の資料は最も豊富であり、また、沙流方言と地理的に近い千歳方言のデータは筆者にとって入手しやすいため、本稿は沙流方言と千歳方言のデータを合わせて議論を行う。

なお、アイヌ語のデータは雅語で語られる韻文物語と日常語で語られる散文物語に分けられる(知里 1973[1954]: 156)。本稿は記述的な立場から、散文物語のうち、自然会話に近い *uwepeker* (昔話)、*upaskuma* (伝説)、*ukoysoytak* (会話) の三種類を基礎データとして使用する。

2. 本稿における文法用語の定義

アイヌ語は形態論的範疇のアスペクトを持たない(田村 2003)。ゆえに、本稿で「継続」と「完了」という用語を用いる場合、いずれも意味機能を指す。また、それらの意味を表すものをそれぞれ「継続形式」と「完了形式」と呼ぶ。

PRF…完了、SBJ…主格、SFP…文末助詞、SG/PL…単数/複数、OBJ…目的格

⁴ アイヌ語の動詞は義務的に人称が表示される。ただ、3人称の標示はゼロ形態の接辞で表される。本稿では、そのことを見やすくするために3人称接頭辞を「ø=」で表示することにする。また、本稿で引用した例文における3人称接頭辞「ø=」、形態素の間の「=」、グロス、下線はすべて筆者によるものであり、誤りはすべて筆者の責任である。

⁵ 萱野(2002)の例文はすべてカタカナ表記を採用している。本稿ではそれらの例文を引用する際、萱野(2002)に載っているカタカナとローマ字表記の対応関係に従い、カタカナ表記をローマ字表記に直している。誤りは全て筆者に帰する。

本稿では一般言語学で使用されている用語「perfective」と「perfect」を Comrie (1976) に従って区別する。先行研究の記述を引用する場合を除いては、「perfective」を「完結」に対応させ、「perfect」を「完了」に対応させる。「perfective」と「perfect」の違いは、視点の違いのみである。参照時点より前のできごとを全体的に見ることに重点を置く文法形式は「perfective」を表し、参照時点より前のできごとと参照時点に関連性があることに重点を置く文法形式は「perfect」を表す。アイヌ語は日本語のような動詞の語形変化による形態論的範疇のアスペクトを持たないため、本稿で「perfective」と「perfect」を議論する際には、主に助動詞と助動詞的連語⁶の形式を議論することになる。

また、「perfect」は通言語学的にしばしば完結という意味を表すとされている。一つの動作が終わり、その結果状態が維持されるということは通言語学的に多く見られるが、結果は動作の完結に等しいわけではない。「perfect」における動作の完結という意味は、意味論的な含意 (implication) であり、語用論的な推意 (implicature) によって取り消されることがある⁷。

アスペクト形式が表す意味を明確にする際には、それらの形式と共起する動詞の分類は重要な役割を持っている。動詞は状態動詞、動態動詞、内的限界動詞、非内的限界動詞のいずれに属するかによって、継続形式と完了形式の共起可否および意味変化に関わるため、本稿は工藤 (1995 : 26-80) の日本語についての研究に従い、動詞の種類を下記のように定義する。

状態動詞 (static verb) : 時間の中への現像を問題にしない、展開性のないものである。「ある、いる」、「優れている」などの類。

動態動詞 (dynamic verb) : 時間の中に成立 (開始)・展開・消滅 (終了) し、場合によっては、結果を残す。ものの動的な運動をとらえているものである。「歩く」、「泣く」などの類。

また、動態動詞は「動作」か「変化」かという観点と、「主体の動作」か「客体の変化」⁸かという観点から組み合わせて大きく下記の3分類ができる。

主体動作・客体変化動詞 : 主体の観点からは動作を、客体の観点からは変化をとらえるものである。「開ける」、「折る」、「消す」などの類。

主体動作動詞 : 主体の観点から動作をとらえるものである。「動かす」、「回す」、「打つ」などの類。

主体変化動詞 : 主体の観点から変化をとらえるものである。「行く」、「来る」、「帰る」などの類。

なお、以上の分類とは別に、「そこに至れば運動が必然的に尽きるべき目標としての内的時

⁶ 佐藤 (2008 : 86) は「kor an」と「wa an」を助動詞的連語と呼んでいる。

⁷ この点については佐藤 (2006) を参照されたい。

⁸ 「主体」は動作の主語に、「客体」は動作の目的語に相当する。

間的限界」の有無から、内的限界動詞 (telic verb) と非内的限界動詞 (atelic verb) に2分類することもできる。日本語においては、上記の主体動作・客体変化動詞および主体変化動詞は内的限界動詞 (telic verb) に属し、主体動作動詞は非内的限界動詞 (atelic verb) に属する。

3. 先行研究

アイヌ語の形式「kor an」、「wa an」と「a」が共起する場合の意味機能に関する記述は先行研究においては見られないが、継続形式「kor an」、「wa an」および完了形式「a」の個別の意味機能に関してはすでに綿密な記述が存在する。以下3.1節で継続形式「kor an」と「wa an」の意味機能、3.2節で完了形式「a」の意味機能に関する先行研究を見ることにする。

3.1. 「kor an」と「wa an」の意味機能に関する先行研究

金田一(1931)も知里(1974[1936])もアスペクトに関する記述がごく簡単なものであり、「kor an」を日本語の「つつ」に相当する持続的な意味を表す進行態として見ている。双方とも記述の早期段階なのか、もう一つの継続形式である「wa an」はまとまった機能形式として触れられていない⁹。

中川(1981)は当時の日本語のアスペクト研究の成果を取り入れ、アイヌ語の「kor an」の意味を動作継続、「wa an」の意味を結果継続としている。この記述はそれまでの記述と比べて、「wa an」を一つのまとまった形式として扱い、その形式のアスペクト的な意味を明確にしている。田村(1997)はアイヌ語の文法の全般に関する記述であるため、「kor an」と「wa an」について詳しく分析していないが、「kor an」が進行という意味のほか、習慣を表すことができるということを指摘している。また、「wa an」に関しては、その意味はそれまでの記述と同じく、結果の継続を表すと述べている。

「kor an」と「wa an」について最も詳しく記述しているものとして佐藤(2008)が挙げられる。以下、その主要部分を引用する。

kor an の用法 :

- 1) kor an は動作の継続を表す形式である。
- 2) kor an の an の人称、数は kor an の付く動詞の人称、数に一致する。
- 3) kor an は習慣的動作を表すことがある。
- 4) kor an は変化に至る途中であることを表すことがある。

(佐藤 2008 : 197)

wa an 「ている」の用法 :

- 1) 「主語の位置や状態の変化を意味する自動詞」(ray「死ぬ」、a「座る」など)と用いられ主語に関する結果状態の継続を示す。
- 2) 「主語に状態変化を引き起こす他動詞」(kor「持つ」、mi「着る」、tére「待つ」など)

⁹ ただし、アイヌ語樺太方言の研究においては、知里(1973[1942]: 503-504)は「kor an」が継続態を、「üa an (=wa an)」は結果態を表すとしている。

と用いられ主語に関する結果状態の継続を表す。

3) 動作動詞 (ipe「食事する」、hoyupu「走る」など) には通常は wa an は付かない。この種の動詞に付くことのできる完了的形式は助動詞 a である。a は wa an と違い、完了は完了でも、間接的な結果の場合にしか用いられない。

4) 目的語に変化を及ぼすような他動詞の場合、wa an の an の人称・数は目的語の人称・数と一致する。

5) 否定表現の「～しないでいる」は (ka) *somo ki no an* という形式で表される。

(佐藤 2008 : 200-201) ¹⁰

この記述は「kor an」について、それまでの「動作継続」と「習慣」の意味のほか、「変化に至る途中」という新たな意味を指摘している。また、「wa an」の意味については従来の研究と同じく「結果状態の継続」と記述されている。一方、異なるタイプの動詞との共起関係や、「a」との差異に関してより精密な記述がなされている。

本稿は上記の先行研究に従い、「kor an」と「wa an」を継続形式と呼ぶことにする。なお、「kor an」と「wa an」の意味機能について、吉川 (2019) は動詞の種類と関わる場合の意味変化をさらに詳しく論じている。本稿は4節でその内容を参照しながら「kor an」、「wa an」と「a」が共起する場合の意味機能を議論する。

3.2. 「a」の意味機能に関する先行研究

金田一 (1931) は「a」を完了態の助辞とし、「a」が「ちゃんと...した」、「而もその結果の今まで及んでいるやうな心持」という「完了の様な意味」を表すことを指摘している。そして、知里 (1974[1936]) は「a」をムード (mood) の助詞に分類しているが、「動作の完了又は過去を示してゐることが多い」とも述べている。

次に、沙流方言の記述的な研究においては、福田 (1960) ¹¹ は「a」を助動詞として扱い、その意味は「現在問題になっている時よりも以前に行動が行われたこと」を表す《...した》》に対応し、さらに「現在からみて実際には過去のできごとであっても、それ以後のできごとが問題にされているのでなければこの助動詞は用いられない」と記述している (福田 1960 : 71)。この記述では「a」の意味機能が「完了」と明言されていないが、本稿における「perfect」の定義に合致していると思われるため、ここでは「a」の意味機能が「完了 (perfect)」であると判断する。

なお、千歳方言では、佐藤 (2006) は助動詞「a」が明白な結果を含意しない「主体動作動詞」と「内的情態動詞」の後に現れ、明らかに「動作パーフェクト (perfect)」¹² を表すこと

¹⁰ 佐藤 (2008) は千歳方言のデータに基づき「kor an」と「wa an」について記述を行っている。また、引用した内容にある *tére* の「e」の上に現れる「'」はアイヌ語学におけるアクセント記号である。アクセント記号がある音節は相対的に高く発音される。

¹¹ 本稿では文献を引用する際に、著者の名前である田村すず子、福田すゞ子は表記が違うものの、すべて田村すず子のことである。

¹² 工藤 (1995 : 119) によると、パーフェクト (perfect) には下位概念として動作パーフェクトと状態パー

を指摘している。これに加えて、佐藤（2007）は日本語の肯定、否定とアイヌ語の「a」を比較する中で、「a」は動作結果が知覚不可能な完了だとしている。

本稿は上記の先行研究に従い、アイヌ語の完了形式「a」の意味機能が完了（perfect）であると見なす¹³。

4. 「kor an」、「wa an」と「a」が共起する場合の意味機能

3.1節の先行研究で触れたように、「kor an」は「動作継続」、「習慣」、「変化に至る途中」という意味を表し、「wa an」は「結果継続」という意味を表す。以下では「動作継続」、「習慣」、「変化に至る途中」を表す「kor an」、「結果継続」を表す「wa an」という順番で「a」と共起する場合の意味機能を記述していくことにする。

4.1. 動作継続を表す「kor an」と「a」が共起する場合

アイヌ語の継続形式「kor an」は、すべてのタイプの動詞に後続して動作の継続を表すわけではない。吉川（2019）によると、「kor an」は非状態動詞の非限界動詞と共起する場合のみ、動作の継続を表す。ゆえに、以下ではアイヌ語の非状態動詞の非限界動詞を主な対象とし、完了形式「a」と共起する場合の意味を記述する。

工藤（1995）の日本語のアスペクト研究における動詞分類に従うと、非状態動詞の非限界動詞は主体動作動詞に相当すると考えられる。

- (3) tap pakno ku=y^{pe}¹⁴ kor k=an a wa.
 今 まで 1SG.SBJ=食事する ながら 1SG.SBJ=いる PRF SFP
 「今まで私は食事をしていたよ。」（佐藤 2008 : 185）

例（3）の動詞「ipe (y^{pe})」は食事するという意味の主体動作動詞である。佐藤（2006）のアイヌ語の動詞分類によると、「ipe（食事する）」は非内的限界動詞である。すなわち、「ipe（食事する）」という動作は必然的な完成限界がなく、時間軸でいつ終わっても、「ipe（食事する）」という動作が成立する。

先行研究からわかるように、「ipe kor an（食事している）」は、食事の動作が進行していることを表す。しかし、例（3）においては「kor an a」は何を表しているのか不明確である。アイヌ語の継続形式と完了形式が共起するという現象は、英語の「perfect progressive」を想起させる¹⁵。Leech（1987）によると、英語の「perfect progressive」と「perfect」は終結について

フェクトの2種類がある。

¹³ 上記の先行研究とは別に、沙流方言と千歳方言に基づいて吉川（2020）は「a」が完結「perfective」を表すとしている。アイヌ語の助動詞「a」が「perfect」を表すのか、「perfective」を表すのかには、議論の余地があるが、筆者は基本的に「perfect」の立場にある。その議論は別稿に譲りたい。

¹⁴ アイヌ語の音韻規則では、人称接辞「ku=」と動詞「ipe」が連続する際、「ipe」は「y^{pe}」になる。

¹⁵ ただし、英語の「perfect progressive」においては完了形式と継続形式の間に否定辞や副詞などが挿入されることがある。一方、アイヌ語の「継続形式」+「完了形式」からなる「perfect progressive」は両形式の間に「pe ne（ものだ）」、「ruwe ne（のだ）」などの要素が入ることが多い。

の視点が異なる。

(4) They've been widening the road ('They are still at it'). (Leech 1987 : 51)

(5) They've widened the road ('The job's finished'). (Leech 1987 : 51)

例(4)は「perfect progressive」の文である。Leech(1987)の解釈によると、「widen」という動作は発話時を参照時点とすれば、参照時点の後にもまだ続く可能性がある。一方、例(5)は「perfect」の文であり、その動作「widen」は発話時においてすでに終結している。以下で、アイヌ語の継続形式と完了形式が共起する例(3)と完了形式のみの例(6)との比較を行う。

(6) tane ku=ype a wa.
今 1SG.SBJ=食事する PRF SFP
「もう私は食べたよ。」 (佐藤 2006 : 64)

例(3)は、「ipe kor an(食事している)」という動作が発話時まで続いていると解釈できる。英語の「perfect progressive」のように、その「ipe(食事する)」という動作は発話時まで継続し、発話時を過ぎても続く可能性がある。しかし、例(6)の完了形式「a」のみの文では、英語の「perfect」のように、発話時において「ipe(食事する)」という動作はすでに終わっている。これを図で表現すれば、それぞれ図1と図2のようになる。

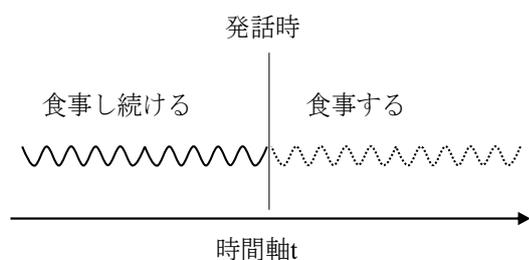


図 1 : 例 (3) が表す意味

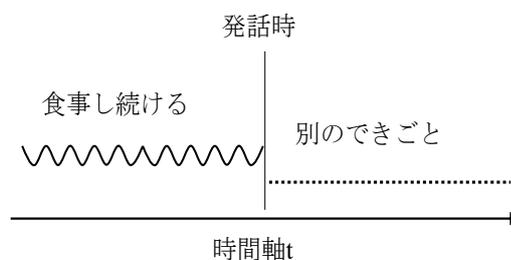


図 2 : 例 (6) が表す意味

つまり、継続形式「kor an」の本来の動作継続という意味の影響もあり、「kor an+a」は発話時以後に同じ動作が継続する可能性がある場合に用いることができる。一方、「a」だけの場合は、発話時に動作がすでに完結していることを含意している。

しかし、主体動作動詞と共起する際、「kor an+a」は「kor an」の意味機能に影響されるだけでなく、「a」の意味機能に影響される場合もある。

(7) esir eawne k=arpa (ku=arpa) akusu awun unarpe
先程 隣へ 1SG.SBJ=行く (1SG.SBJ=行く) したら 隣の おばさん

\emptyset =isitayki \emptyset =koarikiki kor \emptyset =an a wa.
 3SG.SBJ=機を織る 3SG.SBJ=に精を出す ながら 3SG.SBJ=いる PRF SFP
 「先程私が隣に行ったら隣のおばさんは
 機織りに精を出していたよ。」(萱野 2002 : 54)

例(7)で、「isitayki koarikiki kor an (機織りに精を出している)」という継続動作は、話者が先ほど隣へ行ったときのことであり、発話時には、もうすでに続いていない可能性がある。この場合、「isitayki koarikiki kor an (機織りに精を出している)」という継続動作は完結したかどうかというより、発話時からすこし離れた過去に行われた継続的な動作として捉えられている。すなわち、「isitayki koarikiki kor an (機織りに精を出している)」という継続動作は「a」の意味機能によって最近の活動 (continues up to recent past) として認識されていると考えられる。この意味を図で表現すれば、図3のようになる。

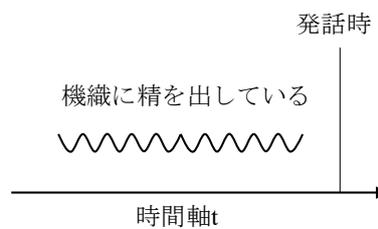


図3：例(7)が表す意味

佐藤(2007: 11)によると、アイヌ語の過程完了を表す「a」には、テンス的な近過去、遠過去という区別がなく、両方を表すことができるという。例(7)にある「a」は副詞「esir (先程)」によって「isitayki koarikiki kor an (機織りに精を出している)」という継続動作を時間軸上、発話現在とすこし離れた過去に位置させている。その結果として「isitayki koarikiki kor an (機織りに精を出している)」という継続動作が最近の活動として認識されるようになったと考えられる。次の例文は「kor an + a」が最近の活動を表すことをより一層明確に示している。

- (8) esir pakno toy ankura otta (oro ta) \emptyset =sinot kor
 先程 まで 畑 畔 ところに (ところ に) 3SG.SBJ=遊ぶ ながら
 \emptyset =an a p (\emptyset =an a p) hinakun (hinak un)
 3SG.SBJ=いる PRF のに (3SG.SBJ=いる PRF のに) どこへ (どこ へ)
 \emptyset =arpa wa \emptyset =isam ruwe an
 3SG.SBJ=遊ぶ て 3SG.SBJ=ない の COP
 「先程まで畑の畔に遊んでいたのに、
 どこへ行っていないのだ。」(萱野 2002 : 41)

例(8)の「sinot kor an (遊んでいる)」は過去のある期間に継続していたが、発話時現在まで続いていない。すなわち、「sinot kor an (遊んでいる)」は後続している「a」によって、時間軸上で発話時点と離れた過去に位置づけられることになり、過去のある期間に継続した活動として認識されるようになった。

4.2. 習慣を表す「kor an」と「a」が共起する場合

本稿で収集したアイヌ語の習慣を表わす継続形式「kor an」と「a」が共起する例文の数はかなり限られている。習慣の解釈は文脈に依存するため、一文だけでは習慣とみなすのは難しい。以下、習慣の意味として理解可能な例文を選んで考察していく。

- (9) a=kupákupa humi sircipukrototo, kor án=an
1SG.SBJ=噛む PL 音 プツプツと音がする ながら いる=1SG.SBJ
ranke p ne a p, sine an pe ta, a=poho i=kopasrota a
ITERA もの COP PRF のに あるときに 1SG.SBJ=の子 1SG.OBJ=罵る ITERA
i=kopasrota a hawe ene ø=an hi
1SG.OBJ=罵る ITERA 声 このように 3SG.SBJ=ある こと
「毎日¹⁶、繰り返し、かむ音がプツプツとしていたのですが、
あるとき、息子が私をさんざんののしって、こう言いました。

(田村 1985 : 2-4)

例(9)は息子からろくな食べ物をもらえないので、着物のえりを食べる母親が話した内容である。この動作「sircipukrototo kor an (プツプツと音がしている) +a」は過去のある時から発話現在までの間、繰り返して発生しているため、文脈から理解すれば、一種の習慣と見なすことができる。

また、この母親は常にえりを噛むのではなく、息子夫婦が寝ているときだけ噛んでいるため、「sircipukrototo kor an (プツプツと音がしている) +a」は時間軸上、断続的に捉えることができる。そして、文脈から判断するに、「sircipukrototo kor an (プツプツと音がしている + a)」はこれからも起こる可能性がある。ゆえに、例(9)の継続動作「sircipukrototo kor an (プツプツと音がしている) +a」は図4のように表現することができる。

¹⁶ アイヌ語の原文には「毎日」に対応する言葉がないが、これは日本語に訳された際に、訳者により文脈から補われたものだと考えられる。本稿では田村(1985)の通りに引用した。

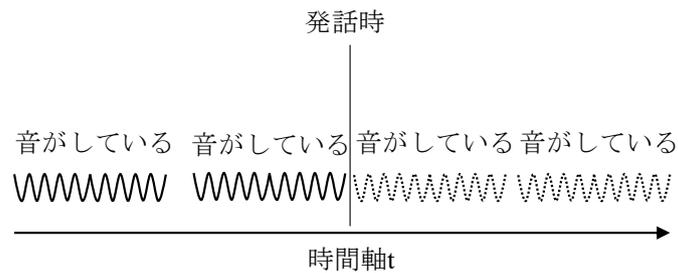


図4：例(9)が表す意味

このような状況では「sircipukrototo kor an (プツプツと音がしている) +a」が一貫した過去の習慣として捉えられているのではなく、個々の時間幅のある継続的な動作からなる習慣として捉えられていると解釈できる。

例(9)と比べて、同じ習慣を表す「kor an+a」の例(10)は多少ニュアンスが異なる。

- (10) kamuy asur ne a=nu kor oka=an pe ne a
 神 評判 COP 1SG.SBJ=聞く ながら いる PL=1SG.SBJ もの COP PRF
 p、 sine an pe ta i=y=etun yak ø=ye kor
 のに ある時に 1SG.OBJ=挿入音=借りる と 3SG.SBJ=いう ながら
 ø=san ruwe ne
 3SG.SBJ=下りる の COP

「すばらしい評判として聞いていたのですが、
 あるとき、その長者が私を嫁に欲しいと言って、
 上流の村から、下りて来ました。」(田村 1985 : 22-23)

例(10)にある「nu kor an (聞いている) +a」の対象は素晴らしい評判のことである。例(9)の「sircipukrototo kor an (プツプツと音がしている) +a」のような規則的、連続的な継続動作ではなく、例(10)の「nu kor an (聞いている) +a」は過去のある期間において断続的に行われた動作として捉えることができる。ゆえに、「nu kor an (聞いている) +a」という継続動作は例(9)より狭い時間幅を持っているように考えられる。つまり、この場合、例(9)のある程度時間幅を持つ継続動作と異なり、「nu kor an (聞いている) +a」は図5のように、複数の点として捉えることができる。

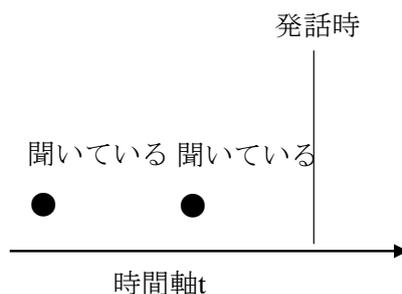


図 5：例（10）が表す意味

なお、習慣を表す「kor an」＋「a」は動詞の意味によって「時間幅のある継続動作」と「点的継続動作」の両方に解釈できる場合もある。

- (11) te ta ø=pon sísam tap a=ye koraci ø=nína
ここに 3SG.SBJ=小さい 和人 今 1SG.SBJ=言う ように 3SG.SBJ=薪採りする
kor mur ø=tasa wa、 ø=e kor ø=an
と ぬか 3SG.SBJ=交換する て 3SG.SBJ=食べる ながら 3SG.SBJ=いる
pe ne a p、 sine an ta suy ø=ekimne híne
もの COP PRF のに ある日に また 3SG.SBJ=山へ行く て
「うちの小さい和人は、今言ったとおり、薪をとって来ますと、
ぬかと交換して食べていたのですが、
ある日、また山へ行って」(田村 1986 : 22-23)

例(11)にある「e kor an (食べている) + a」は実際に交換してきたぬかを「食べる」動作として見なすこともできる一方、「薪でぬかと交換すること」で生計を立てていることとしても解釈できる。「e kor an (食べている) + a」は実際の動作と見なす場合、図4のように、時間幅のある継続動作として解釈できる。一方、「生計を立てている」という意味で解釈する場合、「e kor an (食べている) + a」は図5と少々異なり、複数の点ではなく、全体的に一つの点として捉えることができる。

以上、習慣を表す「kor an」と完了形式「a」が共起する場合の意味機能を記述した。例文からわかるように、習慣を表す「kor an」＋「a」はその意味解釈が文脈に依存している。例文が限られているが、「kor an + a」は時間幅のある継続動作と点的な継続動作の二つの捉え方があることがわかる。場合によって両方にも捉えることができるが、それはその動作をどのように認識するかによるものである。

4.3. 変化に至る途中を表す「kor an」と「a」が共起する場合

吉川(2019)は「kor an」が変化の進行の過程を表す場合、限界動詞と共起する必要があることを指摘している(吉川 2019 : 103)。以下、限界動詞と「kor an」＋「a」が共起する場合

のみを議論していく。

- (12) turepta=an kor i=tura wa a=tura wa
 オオウバユリを掘る=1SG.SBJ ながら 1SG.OBJ=連なる て 1SG.SBJ=連なる て
 turepta=an wa hekote a=rura kor
 オオウバユリを掘る=1SG.SBJ ての方へ 1SG.OBJ=運ぶ と
 ø=etuye kor oka=an pe ne a p
 3SG.SBJ=頭を切る ながら いる PL=INCL.SBJ もの COP PRF のに
 「オオウバユリを掘りに行き、一緒にオオウバユリを掘って、
 祖母の方へ運ぶと、祖母はその頭を切りながらいた者で
 あったのだが、」 (アイヌ語調査研究事業報告書：23-8-10¹⁷)

佐藤(2006)のアイヌ語動詞分類に従うと、「etuye(切る)」は内的限界動詞に属する。「etuye kor an(頭を切っている)」は「etuye(頭を切る)」という動作が継続していることを表している。その継続している動作は、時間軸で発話時点あるいは参照時点より前のある時点から始まり、完了形式「a」によって発話時点あるいは参照時点まで続き、そして終結したというように捉えることができる。この場合、「etuye kor an(頭を切っている)」は限界のある継続動作として捉えられていると解釈できる。この状況は図6で表すことができる。

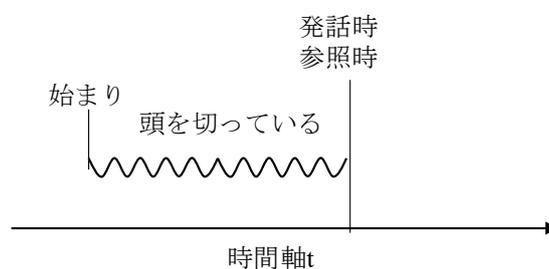


図6：例(12)が表す意味

つまり、「etuye kor an(頭を切っている)」という継続動作は、過去のある時点に始まりを持ち、「a」の現在関連機能によって発話時点で終結した、という限界的な過程として捉えられている。これは4.1節で議論した動作継続を表す「kor an」と一見して類似しているが、実は発話時点あるいは参照時点以後に動作が継続しているかどうかの点において異なる。この状況を例(13)はより一層明確に示している。

- (13) konto weysir hekote weysirkotor peka iki=an ayne

¹⁷ アイヌ語調査研究事業報告書とは、平取町立二風谷アイヌ文化博物館「アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業」のアーカイブ資料のことを指す。「23-8」はアイヌ語データの番号であり、「-10」は筆者が付けた行番号である。

今度 山 の方へ 山坂 を 何をする=1SG.SBJ あげく
hemesu=an kor an=an a p a=ramu a p
登る=1SG.SBJ ながら いる=1SG.SBJ PRF のに 1SG.SBJ=思う PRF のに
「今度急な山の方へ急な山の斜面を歩いて行ったあげく
登っていたので（安全だ）と思っていたのだが」
(アイヌ語調査研究事業報告書：24-4-28)

「hemesu kor an (登っている)」は限界のある動作「hemesu (登る)」の継続形式である。「hemesu kor an (登っている)」という継続動作は必ず終結点を持っている。例 (13) では完了形式「a」の影響で、この終結点は発話時になっている。ゆえに、例 (12) と同じように、例 (13) の「hemesu kor an (登っている)」も限界のある過程として捉えられる。

4.4. 結果継続を表す「wa an」と「a」が共起する場合

アイヌ語の「wa an」は状態動詞と動作動詞（変化動詞を含む）の両方と共起することができる。以下、状態動詞と動作動詞を分けて記述していく。

状態動詞は、中川 (1981) によると、単独で「静的な状態」を表し得る動詞である。このような動詞には、日本語の形容詞に相当する *pirka* (良い)、*poro* (大きい)、*eraman* (わかる) などがある (中川 1981 : 132) ¹⁸。

(14) turano ku=yupo kamuy ø=cotca
共に 1SG=の兄 クマ 3SG.SBJ=射る
acapo na ø=iwanke wa ø=an a wa.
おじさん まだ 3SG.SBJ=元気で 3SG.SBJ=いる PRF SFP
「共に私の兄がクマを撃ったおじさんまだ元気でいたよ。」(佐藤 2008 : 41)

(15) ø=poon hekaci e=ne hi ta patek eci=nukar
3SG.SBJ=ちっちゃい 子供 2SG.SBJ=COP 時に だけ 2SG.OBJ=見る
pe ne a p isirkuran tane e=poro hi ka
もの COP PRF のに なんとまあ 今 2SG.SBJ=大きくなる ことも
k=eramus kari no k=an a ruwe ne wa.
1SG.SBJ=知らないで 1SG.SBJ=いる PRF の COP SFP
「ちっちゃーい子供であった時にだけ私はお前を見た
ものであったが、なんとまあ、今、お前が大きくなったことも
知らない私はいたんだよ。」(佐藤 2008 : 175-176)

¹⁸ アイヌ語の動作動詞、変化動詞、状態動詞などに関する分類は、中川 (1981) と佐藤 (2006) の分類を参照した。なお、アイヌ語学においては、形容詞という品詞が設けられていない。日本語の形容詞に相当するものはアイヌ語では動詞で表される。

例(14)にある「*iwanke* (元気である)」と例(15)にある「*eramuskari* (知らない)」はいずれも状態動詞である。状態動詞と「*wa an*」が共起する場合、「一時性」あるいは「一時的な状態」を表すことがある(佐藤 2008 : 200、吉川 2019 : 103)。つまり、「*iwanke wa an* (元気である)」、「*eramuskari no an* (知らないでいる)」¹⁹は恒常的な性質というより、一時的な状態として捉えられている。その後ろにさらに完了形式「*a*」が後続すると、「*wa an*」が表す一時的な状態は完了形式「*a*」の現在関連性の機能によって、発話現在まで続いていると捉えることができる。ゆえに、「*a*」によって例(14)の「*iwanke wa an* (元気である)」という一時状態が発話現在まで至っている。例(15)の「*eramuskari no an* (知らないでいる)」という一時状態も発話現在まで続いている。この意味を図で表現すれば図7のようになる。

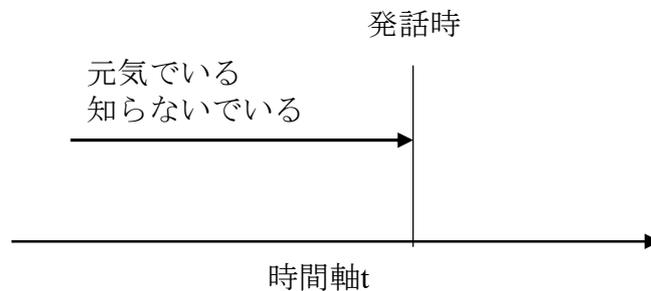


図7：例(14)(15)が表す意味

一方、動作動詞(変化動詞を含む)と「*wa an a*」が共起する場合の例文として、例(16)と例(17)が挙げられる。

- (16) \emptyset =pon ecinke sapaha \emptyset =etuk wa \emptyset =an a p
 3SG.SBJ=小さい 亀 の頭 3SG.SBJ=突き出る て 3SG.SBJ=いる PRF のに
 suy \emptyset =yontektek híne sapa ka \emptyset =sak wa \emptyset =an
 また 3SG.SBJ=を急にちぢめる て 頭 も 3SG.SBJ=持たない て 3SG.SBJ=いる
 「小亀が頭を(首を)出してていたがまたサッとひっこめて
 頭(首)がなくなっている。」 (田村 1996 : 872)

- (17) senriyopako pu a=esikte wa \emptyset =an a p
 千両箱 倉 INDF.SBJ=いっぱい入れる て 3SG.SBJ=ある PRF のに
 「千両箱が倉にいっぱい入れてあったのだが」 (田村 1996 : 124)

例(16)にある「*etuk* (突き出る)」は主体変化動詞である。「*wa an*」と共起する場合、「*etuk*

¹⁹ 「*no an*」は「*wa an*」の否定形式である。

「突き出る」という変化がすでに終わって、「etuk wa an (突き出ている)」という変化の結果継続を表している。この点に関してはすでに佐藤 (2006) によって指摘されている。「wa an」にさらに完了形式「a」が後続する場合、その結果継続は全体的として発話時点と関るようになる。「etuk wa an (突き出ている)」という結果継続は発話時点において、すでに終わっているため、図 8 で示されているように、時間軸上で発話時点とすこし離れているように解釈できる。

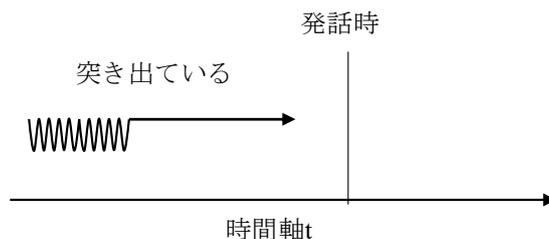


図 8：例 (18) が表す意味

この「wa an a」が表す意味は動作継続を表す「kor an a」が表す意味と類似しているように見えるが、「kor an a」が最近の活動を表すことに対して、「wa an a」は最近の状態を表すと考えられる。

例 (17) の「wa an a」が表す意味は例 (16) の「wa an a」が表す意味と少々ニュアンスが異なる。「esikte (入れる)」は変化動詞であるが、主体の変化ではなく、客体の変化を表している。ゆえに、「esikte wa an (入れている)」は客体変化の結果継続を表すことになる。



図 9：例 (17) が表す意味

図 (9) が示しているように、「esikte wa an (入れている)」という状態は発話時点まで続き、発話以後も続く可能性がある。この場合、「esikte」という変化の影響、すなわち結果継続は「a」の現在関連性によって発話現在において鮮明に残っていると解釈できる。この点において例 (17) は例 (16) と異なる。例 (16) の方は、最近の状態として捉えることができるが、その変化の影響は発話現在と緊密に関わっているように解釈することができない。これは佐藤 (2007) がいう「a」の「知覚不可能」という意味と一致している。

5. まとめと課題

以上、本稿ではアイヌ語の継続形式「kor an」、「wa an」と完了形式「a」が共起する場合の意味機能について記述を行った。本稿で得られた結果は、以下の表1のようにまとめられる。

表1：「kor an+a」と「wa an+a」の意味機能

形式	動詞の種類	意味機能
kor an+a	主体動作動詞	①動作継続が発話まで続き、発話以後も続く可能性がある。
		②文脈によって最近の活動として認識されることがある。
		③個々の時間幅のある継続動作からなる習慣として捉えられることがある。
		④点として捉えられる動作継続からなる習慣を表すことがある。
		⑤ ③と④の両方に解釈できる。
kor an+a	主体変化動詞 客体変化動詞	⑥限界のある過程として捉えられることがある。
	wa an+a	状態動詞
wa an+a	主体変化動詞	⑧最近の状態を表す。
	客体変化動詞	⑨結果継続は発話現在において鮮明に残っている。

本稿は、継続形式を「kor an」と「wa an」に限定して「a」と共起する場合の意味機能について記述したが、アイヌ語における他の継続と見なされる形式「kane an」について議論ができなかった。また、表1にある同じ種類の動詞と「kor an+a」、「wa an+a」が共起する時、類似した意味を表す可能性があるのか、例えば⑥と⑧に共通性を見出せるかどうか、更なる例文を収集して検証する必要がある。なお、「kor an+a」と「a」および「wa an+a」と「a」はそれぞれ文脈によって意味が中和される（同じ意味を表す）例もあるが、例文を収集してより詳しく議論する必要がある。いずれも今後の課題としたい。

謝辞

*本稿は馬（2022）の一部に内容を追加し、北海道民族学会 2022 年第 2 回研究会にて発表した後、さらに加筆修正を行ったものである。北海道民族学会 2022 年第 2 回研究会にて発表した際、多くの方々より貴重な意見をいただいた。また、本稿の内容に関して 2 名の査読者の方々より貴重な助言をいただいた。この場を借りて感謝を申し上げたい。なお、本研究は日本学術振興会科学研究費（研究活動スタート支援、課題名「中国語から見たアイヌ語のアスペクト形式の意味機能」、課題番号：22K19983、研究代表者：馬長城）の助成を受けたものである。

参考文献

平取町立二風谷アイヌ文化博物館

(2013-2014)「アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業」報告書

<http://www.town.biratori.hokkaido.jp/biratori/nibutani/culture/language/story/> [2022年10月アクセス].

知里真志保 (1974/1936) 『アイヌ語法概説』 (『知里真志保著作集』 4.1-197. 東京: 平凡社 所収)

知里真志保 (1973/1942) 『アイヌ語法研究』 (『知里真志保著作集』 3.455-586. 東京: 平凡社 所収)

知里真志保 (1973/1954) 「アイヌの神謡」 (『知里真志保著作集』 1.153-222. 東京: 平凡社 所収)

Comrie, Bernard (1976) *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.

萱野茂 (2002) 『萱野茂のアイヌ語辞典 (増補版)』 東京: 三省堂.

金田一京助 (1931) 「アイヌユーカラ語法摘要」 『アイヌ叙事詩ユーカラの研究 2』 2-233. 東京: 東洋文庫.

工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』 東京: くろしお出版.

Leech, Geoffrey N. (1987) *Meaning and the English Verb*. Second edition. New York: Longman Inc.

馬長城 (2022) 『日本語と中国語の対照から見たアイヌ語の時間表現』 博士論文、北海道大学.

中川裕 (1981) 「アスペクト的観点から見たアイヌ語の動詞」 『言語学演習』 81: 131-141.

佐藤知己 (2006) 「アイヌ語千歳方言のアスペクト-kor an、wa an を中心として」 『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』 12: 43-67.

佐藤知己 (2007) 「再びアイヌ語千歳方言のアスペクトについて」 『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』 13: 1-14.

佐藤知己 (2008) 『アイヌ語文法の基礎』 東京: 大学書林.

田村雅史 (2003) 「アイヌ語におけるアスペクトに関する従来の記述の概観」 『itahcara (イタハチャラ)』 1: 17-24.

田村 (福田) すゞ子 (1960) 「アイヌ語沙流方言の助動詞—アイヌ語の助詞についての報告その 1—」 『民族学研究』 24 (4) : 67-78.

田村すゞ子 (1985) 『アイヌ語音声資料 2』 東京: 早稲田大学語学教育研究所.

田村すゞ子 (1986) 『アイヌ語音声資料 3』 東京: 早稲田大学語学教育研究所.

田村すゞ子 (1996) 『アイヌ語沙流方言辞典』 東京: 草風館.

田村すゞ子 (1997) 「アイヌ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典コレクション: 日本列島の言語』 1-88. 東京: 三省堂.

吉川佳見 (2019) 「アイヌ語の存在型アスペクト「kor an」「wa an」の意味範疇について」 『千葉大学ユーラシア言語文化論集』 21: 87-106.

吉川佳見 (2020) 「アイヌ語における「完了」表現があらわす証拠性」 『北方言語研究』 10: 203-218.

執筆者紹介

氏名: 馬 長城 (マ チョウジョウ)

所属: 北海道大学文学研究院

Email: machangcheng168@gmail.com